

# 森有正の思想とフランスの教育の同調性

## Synchronicity between the Thought of Arimasa MORI and Education in France

不破民由 (FUWA, Tamiyoshi)

Japanese have learned European languages and civilizations for about 130 years. However, few people have really understood them.

Arimasa MORI (1911~76) studied the thought of Descartes and Pascal. After he went to France, his life changed completely. He did his best to understand French and European civilizations. Through his lonely life he found his identity in France.

He introduced French education to Japan and compared it to Japanese education.

### 1. はじめに

現代日本の教育を考える上で、欧米の教育に関して研究することの意味を沼田裕之は鋭く提起している。<sup>(1)</sup> 特に、時間意識の差異に焦点を当てつつ、そもそも「理念」・「目的」を掲げて思考し、行動することが日本の文化・社会ではなじみにくいことを論考した点からは多くの示唆を受ける。しかしながら、沼田自身が言うように、そもそも教育学が欧米の学問の翻訳であることを考えると、こうした問題点は自明のことであったはずだ。さらにいえば、哲学・社会科学・人文科学全般についてもいえよう。

森有正 (1911~76) は表面的な西欧文明の受容にとどまらず、血肉化しようとした稀有な存在として多くの示唆を与えてくれる。1950年の渡仏以前にすでにパスカルやデカルトの研究者として実績を上げていた森有正は渡仏によって思想研究者から思想家へと変貌する。森有正はフランス留学を望まなかった。ホームシックではなく、マルセイユに着いたときに日本へ帰りたくなるのである。

それは書物を通じて、想像の上だけで知っていたヨーロッパの学問と思想との深さと厳しさが、一日汽車に乗って行ったパリには現実<sup>ニ</sup>に在るのだということが今更のように判った時の恐ろしさだった。(「文化の根というものについて」、『集成4』161頁。傍点原文。)<sup>(2)</sup>

このような強い衝撃から、一年のみの留学予定が、一時的な帰国を除き25年以上のフランスに滞在へと変わるのである。そして、森有正はヨーロッパ文明の背後に見出した「経験」の厚みを、自身の経験の深まりにおいて理解していく。そうした変貌は次のような「内的促し」によってのみ思考・行動をしようという宣言から出発している。

僕は僕のヴェリテに従ってのみ自分の思考と行動とを規律しよう。それに反することは一切しないことを決意する。(『バビロンの流れのほとりにて』、『集成1』15頁。)

森有正の思想の重要な概念は「経験」であるが、ひとことで説明することは難しく、また、安易に説明することを拒否する性格のものである。西欧文明そのものもまた同様に、安易な受容を許さないものであることを森有正は戒めている。日本における明治以降の西欧文明受容に対する批判として、われわれが森有正からもっと学ぶべき豊かな可能性を示している。もちろん、時代的な限界もあり、森有正はある意味で「拝外」思想の権化のように批判され<sup>(3)</sup>よき理解者である辻邦生でさえ対談において、「西洋が先生で日本は生徒だという図式がどこかに跡をひいて」おり、「しかしそれは現在の時点ではほとんど有効性を失った考え方」<sup>(4)</sup>と述べている。しかし、西欧文明の普遍性を学ぶ態度の一つの例証として森有正の思想を検証することは現代においても意義がある。なぜならば、単にヨーロッパから学ぶのではなく、日本での幼少期からの自分の歩みに円環的に回帰していく森有正は、いわばアイデンティティーの確立という現代の日本人にとっても重要な視点を提示しているのだから。<sup>(5)</sup>

本小論では森有正の思想とフランスの教育の同調性に絞って論考を行う。アイデンティティーの確立ということでは、当然教育という事象へと森有正の関心は向かうのである。また、フランスでは社会・思想が教育と大きく連関しているという森有正の指摘に従えば、フランスの教育をどのように見ていたかを考察することは、フランスの社会・思想ひいては西欧文明を森有正がどう見ていたかを考える一助ともなるはずである。近年、フランスの教育の主旋律が、ルソーの教育思想でなく、デカルトの思想の影響が大きい知性主義、主知主義であることがわが国でも理解されてきている。<sup>(6)</sup> デカルトの研究者でもあった森有正が、フランスの教育と波長が合うのも当然であるが、新教育運動やブルデューらの批判と対比させることで、森有正のフランスの教育への賛辞の意味をを浮かび上げることができる。そして、フランスの教育におけるアイデンティティーの確立を促す性格について考察したい。

## 1. 森有正の思想形成とフランスの教育の接点

長期間(1950~76)フランスに滞在した森有正は、パリにひきとった娘がフランスで教育を受け、生活のためあってパリ東洋語学校・ソルボンヌで日本語、日本思想・文化を教えた。森有正はフランスの教育に対する言及をを主としてこの二点から行う。そして、森有正は1968年(明治100年)のいわゆる「五月革命」に当事者として遭遇した。「五月革命」はフランス知識人はもとより、日本のフランス研究者にも多大な影響を与えた。しかし、森有正の反応は、衝撃をうけつつも良く言えば大局的・冷静であり、逆に見れば楽観的である。「五月革命」前後に、フランスのアルチュセール、フーコー、ブルデューらが提示したフランス教育制度・構造への根源的な批判を知る私たちは容易には首肯しかねる。「五月革命」そのものに対する評価は定まっていないが、すくなくとも、それまでの知のあり方(学問・教育を含めて)に対して根本的な異議申立てがあったことを考えると、それまでのフランス社会に伝統的な異議申

立てとは違う要素を考慮に入れるべきであろう。自国の教育に対する客観的な評価は難しく否定的になりがちであり、他国の教育に対する評価は甘くなるきらいがあるが、外国人とはいえこのように手放しの評価をすることに対しては懐疑的にならざるをえない。また、森有正より若い世代の日本におけるフランス研究者たちは、フランスの社会・教育に対して、批判的な視点を持っていることも興味深い。例えば、桜井哲夫はアルチュセールに刺激を受けて、近代社会におけるフランスの教育の果たした馴致的役割を摘発し、<sup>(7)</sup> 西川長夫は国民国家論の射程から、フランスに対する日本の神話的イメージに対する読み直しを行っている。「五月革命」時、パリに留学中の西川は森有正とは異なる印象を持った。

五―六月事件のあいだほどフランスの学生と若者に共鳴し一体感を味わったことはないだろう。今思うと、それは私にとって、フランスの歴史や文学に対する見方を根底から変えただけでなく、私の生き方を根底からくつがえすような決定的な事件であった。<sup>(8)</sup>

世代的な感受性の違い、すなわちすでに人間形成の終わった森有正とまさに人間形成を行いつつある桜井、西川とのちがいともいえるが、森有正はフランスの教育に潜む伝統的な水脈を感じ取っている。ポール・ロワイアル・デ・シャンのプチ・エコールを見学しジャンセニストの教育理念・内容が本質的にフランスの教育の主要な内容を形成していることを指摘し、次のように述べている。

デカルトがジェズイットのコレージュ・ド・ラ・フレーシュで教育をうけ、ラブレーやカルヴァンがサント・バルブ校で薫陶をうけたことを考えると、一六世紀から現代までの作家は、こういうユマニズムとクラシシズムを根幹として形成されてきたのであり、現代の、それを受け継いだフランスの教育がそう言う過去の教育の延長として行っているこれらの作家についての教育は、内面からの理解を本質とする。（『砂漠に向かって』、『集成2』、309頁。）

まさに、デュルケムが『フランス教育思想史』<sup>(9)</sup>で展開した主張に合致する慧眼といえる。次に、森有正その人の受けた教育・環境を考えるとところから、論考を始めたい。

#### （1）「遺産相続者」森有正

森有正は、1967年に『エスプリ』に載ったブルデュー・パスロンの『遺産相続者たち』に関する紹介記事を読み、深く考えさせられつつ次のように言い切る。

結局、ここで批判されているのは、保守主義の真髄そのものなのである。しかし、この知的貴族主義を度外視し取捨したら、「古典的」フランス文化には何が残るであろうか。（『砂漠に向かって』、『集成2』、341頁。）

初代文相森有礼を祖父に持つ森有正は、牧師である父明と共に入信した祖母寛子方には岩倉具視を曾祖父にもち、母は水戸徳川家出身であり、貴族的な雰囲気の中で育った。西欧的・キリスト教的な当時の日本の中で特異な環境にあった森家の中で、幼小期からフランス語を始め外国語を学び、病気に苦しみつつ東大で職を得て留学をするという履歴はある意味で特権的である。ブルデューらによる、まさしく「遺産相続者」といえる。森有正がフランスの伝統的な

教育を支持するのも、森有正のこうしたエリート意識による本能的な防衛本能ともみられかねない。

僕の祖父は文部省に入る前、長い間アメリカ公使、イギリス公使をしていた。(…)祖母や父はキリスト教に入っていたし、伯父たちはみなイギリスで小学、中学の教育をうけていた。こういう時代後れの貴族的雰囲気((…)強いていえば、古いオーストリアやイギリスの貴族の間に、今でもいくらかはのこっているだろうような、沈滞した静かな上品な雰囲気である)と、当時の一般社会の未だ知らないヨーロッパ的生活とこの二つのものを、僕は恰も普通の人間の生活のように思っていた。こういう中に育った僕が幸福であったか、不幸であったか、僕は知らない。ただそこから、一種の生活力の弱さとヨーロッパ的感觉が僕の中に滲みこんでしまったことは事実だ。(『バビロン…』、『集成1』、109頁。)

さきに、明治百年ということが盛んにいわれましたが、その明治という近代化によって開かれた教養を吸い取り、また物質的な面でも、そうした時代に築かれた家産を、私自身の教育なり教養なりのために全部使いはたした。とにかく全部消費して、そこでヨーロッパへいった。こういう形になっているわけです。

フランスへは、フランス政府の給費留学生としていきました。ですから、フランスゆきには、ある意味では、私の新しい出発にあたるわけです。けれども、さきに申したように、そうした状況のもとに生まれた私が、明治以来つみかさねられてきた諸問題を、ことごとく背負っていたということは、ここにいうまでもありません。<sup>(10)</sup>

ここで気をつけなくてはならないことは、妹の関屋綾子が当時を回想しているように、14歳で一家の柱である父を亡くし、唯一残った男として森有正が幼き家長役の重責を自覚し、苦難の歩みを始めた<sup>(11)</sup>ことを考えると、お坊ちゃんの甘えとは程遠い現実をみることができる。後に詳述する森有正の子供に対する厳しい見方も、父親の厳しさとともにこうした境遇が影響を及ぼしていよう。

森有正の「文化資本の遺産相続」には二つの特徴があるように思われる。一つはこのような家庭の末裔がたどる多くのパターンである、デカダンな芸術化気質をもち合わせたことである。しかし、森有正は、唯美的生活に落ち込まず、たくましい思索者として存在できた。自己に条件づけられたものを、特権的に見るのではなく、卑下するのではなく、「条件」を「内的促し」によってたどっていき、その条件の中での自己の成熟を待つのである。東大助教授という職を捨てて思想家への道を歩み出した森有正の姿から、特権的文化の素養が必ずしも世俗的成功を支えたものではないことがわかる。二つ目は、祖父以来、西欧近代文明の移入の影響を最も深く受けた家系の「明治以来つみかさねられてきた諸問題を、ことごとく背負って」いたことである。フランスへの帰化を拒み、「日本人・森有正」にこだわったというエピソード<sup>(12)</sup>からも、ほとんどの著作を日本語で書いたことからわかる。

## (2)『バビロン…』<sup>(13)</sup>を転機とした、思想研究者から思想家への変貌

すでに、デカルト、パスカル等に関する豊かな業績があったにもかかわらず、森有正がいか

ら西欧文明を学びなおそうと苦闘したのはなぜだろうか。

丸三年前の九月の末、僕はマルセイユの旧港の近くのバーに入っていた。ある一人の友だちと話をしていた。日本からここに着いたばかりなのに僕は日本へかえりたかった。パリへ行くのが怖くてたまらなかった。そこには必ず僕の手には負えない何かがあるような気がした。(…)僕の観じた恐怖をもう少し分析してみると、パリには僕にとってどうにもならない、密度の濃い、硬質なものがある、という感じだった。そしてパリの方は僕を全然知りもしないし、必要ともしていないのだという感じだった。(『バビロン・・・』、『集成1』、19～20頁。)

パリ留学によって、こうした精神的危機を迎えたのは森有正だけではない。今橋映子は、膨大な日本人留学生たちの資料を読み解き、高村光太郎、島崎藤村らのパリ体験を下敷きにして「憧憬—乖離—内面化の過程」を森有正が試みたとする。<sup>(14)</sup>

森有正は家庭環境からの必然性もあり、フランスの思想家の研究をしていたのだが、自ら思想を形作っていかうとするのである。日常生活のレベルから西欧文明への考察をしていくことが、それまでの自分を捨てて西欧文明へのめりこむことにならず、幼少期からの自己省察へと向かっていくことが特徴的である。西欧文明をその萌芽であるギリシア・ローマ文明から学んでいかうとしようかと、自分が生まれてからの現在までを遡行する内省が同居するのである。『バビロンの流れのほとりにて』は著名なフレーズで始まる。

一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の幼い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代を回顧するとき、そう信ぜざるをえない。この確からしい事柄は、悲痛であると同時に、限りなく慰めに充ちている。(『集成1』、7頁。)

ここでは、ギリシア神話や旧約聖書の予言が援用され、森有正の思想における「経験」のもつ重要性があらわれている。西欧文明と自己の内省が鋭く交差するところに、森有正の思想形成の大きな魅力と特色が現れているのである。

さて、森有正の思想の鍵となることばは「経験」であるが、彼は独自の用法において「経験」ということばを使用している。森有正の到達した記念碑的作品である、『経験と思想』<sup>(15)</sup>を中心にして、この独自の使用法を追う中で森有正の思想を概観したい。まず、彼自身による「経験」定義をみてみよう。

「経験的」と言えば、普通、「合理的」ということと対比して用いられる。しかしここで「経験」と言うのは、そういう意味を遥かに超えている。ここでは認識の源泉とか行為の基本的動機とかいうことはさしあたり問題になっていない。この論述では、「経験」という語を、日常的な意味においての生活の事実をそれ自体において、すなわち凡ゆる利害上の関心から離れて反省する時に、その反省に入ってくる生活の現実を、その反省そのものも含めて、「命名」するのに使用することに決めるのである。(『経験と思想』、41～42頁。)

この定義を見ても森有正の経験に関する考え方はよくわからない。いや、森有正によれば、経験とは定義すべきものでなく、生きていく過程そのものすべてが経験を定義するというの

である。したがって、それぞれの全生涯をあらわしていくものが経験ということになり、森有正が『バビロン…』のシリーズで実践していたことが、自分の経験を露呈させる円環的な作業なのである。

私は本当の経験と思想とは、学校教育とはまったく逆に、人生の終わりになって、一箇の人間が成熟をとげた時に始めて明らかになるものである、と思っている。経験は一箇の人生全体を具体的に定義するものであり、思想は一つの社会に普遍的に用いられる言葉が、その同じものに定義されたものであり、この両者の間には自覚した一人の人間が立っているのである。(『経験と思想』、10頁。)

ここでは成熟を年齢的には捕らえておらず、質的な意味で述べている。経験や思想を他の知識と同様伝達可能なものだとすることへの警戒を示しているのもであって、学校教育における経験や思想の教育においては、こうした限界をまず自覚しておくべきだというのである。その実例として、ポール・ミュスが小学校の同窓であるイカールのことを追悼した文章をあげている。イカールは第一次大戦で二週間もたらず両手両足に大きな傷を負った。

しかしかれは凡ゆる努力をして、義手義足を駆使してともかくも人並みに働けるようになり、七十年の勤勉な生涯を閉じた。ミュス氏が言うには、フランスにはこのように、デカルトの『方法叙説』を読む必要のない人間が多数いるのだ。だからこそまたデカルトのような人が出るのである、と。(…)

この文章は強く私を打った。こういう生涯こそ一つの経験であり、一つの思想ではないだろうか。(…)

経験と思想の研究に意味があるならば、それは、この百姓の生涯に現れたような経験と思想との開始、成熟、完成に向かって各々の人を追いやる底のものでなければならぬ。この百姓は自分が出会った苛酷な現実をしっかりと凝視し、それを背負いきるところから始めた。そこから彼の成熟が始まった。(下線筆者。『経験と思想』、15～16頁。)

この文章はまさに森有正自身がフランスで行ったことを示しているのである。興味深いことは、森有正がブルデューらの紹介記事を読んだ後、『エスプリ』の同じ号からこのイカールの挿話に出遭ったことだ。ブルデューらの告発に対するアンチテーゼを見出したというよりも、フランスの社会・教育の中に森有正が見出した長所が、ブルデューらの告発ではみられない面として強調する必要があるためであろう。

このような「経験」観は、森有正の中で「体験」と対立して提示される。わかりやすくいえば、何事をも教訓的にとらえ、表面的な反省にとどまり、外国からの文化受容においても同様の欠点が見られるというのである。

日本文化の在り方をふりかえるならば、そこに体験的要素がきわめて強く、外国から入ってきたものを、その経験の根底まで掘り下げて思索することをせず、むしろ逆に新しいものを自己の体験で理解しうるものに変化させようとする傾向が無意識のうちに強く働いていたように思われてならない。(傍点原文。「遙かなノートル・ダム」、『集成3』、87頁。)

日本の西欧文明の受容が表面的なものに終わってしまっているという、批判であろうが、そ

もそも異文化を理解することは相対的な差異を自文化との比較において行うのがごく自然なことでないのかという見解も成り立つ。しかし、西欧文明が、そのような比較で理解できる種類のものでなく、きわめて重層的な理解を要求する性質のものであるとすれば、森有正のいらだちも単なる西欧かぶれとは言えなくなるのである。

### （3）森有正の思想形成とフランスの教育の同調性

森有正は西欧文明を以上述べたように、重層的な性格をもち、歴史と伝統に強く裏付けられたものであると考えていた。なぜなら、フランス語を徹底的に学び直し、リセの哲学教科書<sup>(16)</sup>を丹念に読み、ギリシア・ローマからヨーロッパ中を旅して回ることも、森有正が西欧文明の性質をこのように捕らえていたかを物語っているからだ。西欧文明のこのような性質を学んでいく方法が、森有正自身の経験をつぶさに省察していく契機となっていき、同調していくのである。森有正は、個性・創造性は徹底した伝統の摂取から自ずと沸きでてくるものだとしており、個人の中では経験が「変貌」するとは、継続した経験が堆積し、充実する中で自ずと変化するものであることが述べられている。しかしながら、絶え間ざる努力が介在していることを忘れてはならない。

西欧文明と自分自身の経験の同調性ととも、森有正の思想形成とフランスの教育の同調性についても考察したい。森有正は常に教育の問題を独立して述べず、自己との関り、社会との関りで述べている。

フランスの教育で要点となっているところは、知識の組織的集積と発想機構の整備の二つにしばることができる。知識の集積というと、言うまでもなく記憶が主要な役割を果たす。そしてそれは実に徹底している。(…)ことにその記憶そのものが合理的に統制され、たえずコントロールされている有様を見ると、記憶が単に受動的な機能ではなく、発想機構と密接に結びついた積極的機能であることが前提とされているのがわかる。

発想機構の整備はフランス語の授業で集約的に代表される。これは小学校入学から中等教育の終了、すなわちバカロレアの試験まで、全教科の中心的位置に置かれて組織的に遂行される。その眼目は読み理解することよりも書くことに集中される。そのために語彙、文法、作文が低学年から教えられる。方法はまず徹底的に分析的であり、語彙は一語一語吟味されその定義と用法が練習に課され、文法は細則にいたるまで作文によって訓練される。(…)

歴史、地理、公民科なども、作文が最後のしめくりになるので、同時にフランス語の教科としての役割をも果たしているのである。そうして文科系では最高学年に哲学が課され、思考の訓練が行われる。自己の思索を実践発表する発想機構は最後まで開発修練を受ける。

ある意味で、フランスの教育は秀才教育であるとも言われよう。優秀な生徒はどしどし自己を開発して進歩していくが、鈍才は落伍するか、辛うじてバカロレアを通るということになる。ことに現在は科学の進歩に伴って教えることがあまりにも多くなり、生徒の負

担が重すぎるという批判がつねに聞かれ、古典語の廃止などもしばしば問題になる。また殆ど無視されている体育や情操教育をもっと重視せよとの意見もある。しかしそれは枝葉のことで、教育の中心課題が知識の組織的蓄積とそこから自己の発想を行うという眼目に置かれていることは少しも変わりがない。(傍点原文、「霧の朝」、『集成3』、21～23頁。)

このフランスの教育への賛辞はまさしく、彼が思想形成した方法に沿ったものなのである。しかし、森有正がフランスでかような教育を最初から受けていたと仮定して、このように謙虚にその長所を生かしきったであろうか。さらに、「五月革命」でのフランスの「異議申し立て」とはまさに森が評価する教育の内容そのものへの批判も含んでいるのである。例えば、ミッシェル・ド・セルトーは次のように糾弾する。

リセの授業でラシーヌのかわりにブレヒトを教えることは、わが国で受け入れられ認可されている伝統と教育がとり結んでいる関係を修正することである。そのことはまた、学校教師に民衆的表現の矯正者の役割をあてがってきた文化モデルに逆らうような政治的プロブレマティークを導入することでもある。<sup>(17)</sup>

森有正にとっては文化的に抵抗のない古典的教育内容であっても、フランスの庶民階級にとってはそれが出発点で大きな障害になってしまうこともあるのである。ただ、教育内容の階層的ハンディキャップを考慮に入れたとしても、「知識の集積」と「発想の整備」というフランスの教育の理念には学ぶべき普遍性が含まれているのではなかろうか。

まずこの社会の中に入りこまなければならない。それからの解放も反抗も、自我の確立もそれと表裏一体の関係にある。トーマス・マンやリールケやジイドの反抗はこの堅固に構築された社会の中からそれを超えようとすることである。それがこのフランスの社会では最も高い密度の下で行われるのである。そして反抗の対象になるこのブルジョア社会そのものが、すでにいくつかの革命と解放の結果であることを考えなければならない。(『砂漠に向かって』、『集成2』、316頁。)

森有正は、まず西欧の「堅固に構築された社会」を学ぼうと言うのである。フランスの教育の評価もそうした態度の現れと言えよう。

## 2. 言語教育よりみたフランスの教育の評価

『経験と思想』において、日本の体質への批判は日本語および日本人の躰に向けられる。言語の問題については後述するが、ここでは躰の問題について森有正の断罪をあげる。間違っていないのはこうした態度は、子供に愛情がないことをあらわしているのではないことである。森有正は戦争中に幼くして亡くした娘に対する痛切な叫びをあげる。西欧の個人主義的躰、あるいはピューリタニズムの原罪意識の影響も感じられる。このようなコンテキストの中で読むと、「個人」が確立した欧米の親子関係への志向が強く感じられる。

我国において、子供の躰の欠如が問題になってから久しく、現在では問題の存在そのもののすら忘れられかけている。親はすでに躰がなくなり出してから成人し、何を基準にして



子供を躰てよいか判らなくなっている。子供に対する唯一の合理的な態度は子供を「理解」することだと思っている。しかし何に向かって、また何との関係において子供を理解することかという視野が完全に欠如している。子供は未完成なもの、未形成のもの、端的に言って「悪いもの」である。（傍点原文。『経験と思想』107～108頁。）

批判はさらに続き、「亜呆同然な親子が横行する社会」（『経験と思想』108頁。）とまで糾弾する。子供の可塑性を信じ、子供を「よきもの」ととらえる教育学・心理学の見解からすれば、異論を挟みたくなくなる場所である。すでに示唆したように、厳しい父親の目を意識し、その早過ぎる死に自立を促された経験によって、森有正は父親をうらむ気持ちもあったようだが、<sup>(18)</sup> 乾いた親子関係を自分の娘にも実践していることで、こうした主張は矛盾をきたしていない。

ここで言われていることは、まさにフランスの社会の大きな特色でもある「大人社会・文化」<sup>(19)</sup>の表明である。そして、森有正が同時代の哲学者で最も敬愛したアランの教育思想を想起させる。アランの教育思想で特徴的なのは、安易な興味本位による教育への拒否感である。同時代の新教育運動に対しての直接・間接的な批判である。「興味をひくようなものは決して教えてくれない」。<sup>(20)</sup> ルブールによれば、アランは新教育運動に対する理解が不足しており、実際には共通するところも有る。<sup>(21)</sup> しかしながら、子どもの特性を神々しく捕らえすぎることによって、子どもが大人になりたがっているという観点に気づかないというアランの指摘は重要である。「子供は小さな大人だ。子供じみたこと、成年男子のやることを、明確に見分ける」<sup>(22)</sup>という主張には、アリエスが近代以前の社会において見出したマンタリテを「主張」というかたちでアランが述べており、興味深い。教養について等、考察すべき点は多いが、稿を改めて論じたい。以後アランも重視した言語教育の問題を森有正がどのように考えていたかを述べる。

### （1）作文教育における日仏の比較

森有正の『バビロン……』以降の思想形成の方法は、書くことの中で形成されているといえる。はっきりと、こうした方法が表明されている。

「流れのほとりにて」第二部には、この問題〔「書く」とは何であるか、ということ〕に就いての若干の反省があるが、まだまだ不十分で、それに続く本文の中で、それが少しも守られていない。筆の進みが、頭の進みと分離して、筆が進むのではなく、空想が文字の面に映る、という欠点、致命的欠点である。なぜ欠点であるかというと、それは「書く」ということではないからであり、「書く」ということは歩みだからである。思想がなくて書けるか、と自ら反問する。しかし答えなければならぬ。書ける、と。思想が未完成だから、あるいは欠如しているから書くのである、と。思想のようなものが終わるところから書き始めなければならぬ。所謂思想の浮動性に、きまりをつけ、自己の外にものを構成することだ。それ以外に思想はない。そこには、想と区別された文の感覚性が画然と現れてくる。言葉を頭で考えて理解するものだと思うから間違えるのである。（傍点原文。〔 〕内・下線筆者。『城門のかたわらにて』、『集成2』、94頁。）

こうした書くことの意味、言語への姿勢は当然フランス語の特質からきているのだが、パリを始めとした石で作られたフランスの都市や構造物の空間の理解に通じるところがある。言語も都市空間・教会建築も人間精神のあらわれであるとすれば、両者に共通した性格がそこに現れてきても不思議ではない。石畳を含め、石を刻み、積み重ねて幾何学的な構造物を構築している空間はわれわれにはなじみにくい、森有正がフランス語にみた言語の特質に共通するイメージをつかむことができる。森有正が繰り返し述べるフランスの言語教育の美点も、こうした都市のイメージに表される硬質な人間精神の構築作用に比類される。

フランス語は文法によってある程度再構成することができるが、日本語については、それがまったく不可能である。そういう意味で、私は日本語ということばは、特に独修が困難だと思っています。その証拠には、日本においては、教育課目としての作文は、ほとんど直観的なものになってしまっていて、フランス語の場合のように、文法や文章法、あるいは修辞学によってある程度厳密に構成できない。現在の日本の教育課程にどの程度まで作文が課せられているか知りませんが、たとえば民間の綴り方運動のようなものを見ても、文章の訓練というよりも、どういう内容を書くか、という方に重点がいていて、それはフランスでいう作文という厳格な形式のものではないようです。古典的中国語（漢文）と、学的訓練という規範をはずされてしまった現代日本語では、そういう傾向はますます助長されていくでしょう。（傍点原文。「パリ生活の一断面」、『集成3』、154頁。）

ここでも、森有正の言語に対する規範主義への批判を表明することは容易である。たとえば、ブルデューらが「農民や生産労働者、事務労働者や小商人の子弟にとって、学校文化の獲得とは異文化の受容」<sup>(23)</sup>と非難した作用が、フランスの言語教育において存在していることを無視しているのではないか。しかし、作文そのものに不平等な要素があるわけではなく、言語教育として有効であることは、井上ひさしが、平明に次のように日本における言語教育（国語教育）を批判していることから伺える。

感想ではなくて、「何が見えるのか」、「何が書いてあるのか」という、自分が観察したことをそのまま文章で表わす練習が大切でしょう。たとえば、教室の窓から何が見えるのか、それがどんな様子なのか、本であればその中に何が書いてあるのかを、人に報告するように書く。小学校や中学校はそういう勉強をすればよい。（…）この文章〔写生文〕を使って今、私たちは恋もできるし、商売もできる、科学的なことも記述できる。<sup>(24)</sup>

すなわち、言語において思考を組織するという機能を鍛えていこうとするフランスの言語教育のエッセンスに学ぶべきものがある、ということこそ森有正の主張から強調すべきである。

## （２）日本語の非文法的性格

田中克彦の言語に関する仕事から、目を開かされ、勇気づけられることが多い。文法に関する多くの発言も示唆に富む。森有正の文法観・言語観を浮き立たせる上でも有効であるので、引用したい。

文法は、日常的でない言語、大ざっぱに言って外国語学習用に必要なことは言うまでも

ないが、じつは国内にむかって、言葉の作用のしめしをつけるために、近代国家がひとしく持つ必要を感じている。<sup>(25)</sup>（傍点、原文）

文法は文法であるかぎり、それぞれの文法は正しいのであって、それはちょうど、ラテン語の文法は正しいが、英語の文法は間違っていると言えないのと同じである。とすれば、あらゆることばにはそれぞれの文法があり、それぞれ記述でき、それぞれの言語はすべて正しいことになる。<sup>(26)</sup>

日本ではフランス語の国家管理を賛美し、美化し、知識人にはおおむねそれを模範とあおぎ、この神話を拡大再生産する方向にのみ協力してきたように思われる。それは、この神話の強化が、同時に日本における「国語」管理の一層の強化に人々の同意を得る点で役立ったからでもある。<sup>(27)</sup>

特に最後の引用は森有正への批判として読むことが可能である。森有正の日本語ペシミズムといってよい言語観は、ついに彼をしてフランス人向けの日本語教科書まで作らせることになる。<sup>(28)</sup> 森有正は、言語学とは異なる視点で、すなわち、経験、人間存在の根底との関りで言語を論じたとしても、日本語に文法がないなどと、フランス語より劣った言語であるかのような発言にはとても納得できない。

私はある時期には、日本の国語教育が作文を軽視しているのを嘆かわしいことと思ったことがあります。それは教育者の当事者の怠慢というよりも、むしろ現代の日本語そのものがそういう性格の言葉なのである、と最近では考えるようになりました。更に言い換えると、なまの経験と規範化されたものとの批判的対立が構造的に希薄であると思う（全く欠如しているとはむろんいえないが）。これは、言葉のみならず、日本文化のあらゆる領域で認められている事実であります。いったん書かれた文章を磨き上げるにしても、バイヤルグランのような優れた文章法をもつフランスのように、その磨き上げ方を整理して教え、指導することができない。私はパリで日本語のテーマ（仏文和訳）を教えていますが、まったくこの点で絶望しています。日本には文法理論の立派な本はあるけれども、文法そのもののよい本がない。これは文法学者の罪ではなく、日本語の性質そのものによるのだとこの頃思うようになりました。それは社会理論の立派な本は山ほどあっても、手頃な公民読本が少ないのとよい対照を作っています。（傍点原文。「パリ生活の一断面」、『集成3』、155～156頁。）

森有正の指摘からわれわれは、日本語とフランス語の言語の優劣という点を除かなければならない。そして、日本語の特色とは何かという考察に目を向ける必要があるだろう。それは、「なまの経験と規範化されたものとの批判的対立が構造的に希薄である」ということになろう。

### （3）日本語における「二項定理」、「現実嵌入」

森有正が日本人の特色、経験と結びついた日本語の特色としてあげるのが「二項定理」であり、「現実嵌入」である。

例えば「これは本です」と言えば、意味から言えば、「これは本である」、「これは本だ」

と全然同じであるが、この二者に比較してより丁寧に言うという態度を示している。、『経験と思想』、130頁。)

日本語においては、このように常に相手を意識して初めて会話が成立するのである。すなわち、話し相手との関係性において、現実が嵌入してくるのである。一人称は、相手にとっての相手としてのみ存在し、一人称—三人称の関係の会話が成立しないというのである。鈴木孝夫が、相手によって自分をなんと称するか変える、日本語の特質を述べている<sup>(29)</sup>が、事態は同じであろう。したがって、このような日本語の中で暮らす私たちは、常に上下の社会的関係を前提としており、思想も生まれることが困難となる。中村雄二郎は西田幾多郎の思想を現代思想の文脈で新しく読みおこす試みの中で、西田の「純粹経験」を森有正と小林秀雄の「経験」に関する比較を行っている。中村によれば両者の「経験」に共通する点を認めつつ、次のように違いを示し、森有正の経験に関する言説の弱点を指摘する。

森のいう経験が西田の純粹経験と明らかにちがうのは、主体や主語の契機が放棄されずに保持されているという点である。また小林の経験ともちがうところは、間接的にしか知れないく国際場裡に起こること<までも含んでいることである。<sup>(30)</sup> (傍点原文。)

たしかに、「主体の死」を宣言するポストモダンの哲学からは森有正は遠いし、間接経験と直接経験の混同という欠点もある。しかし、『経験と思想』が未完に終わったことから、安易な批判に終わることは慎むべきものだと思筆者は考える。森有正の次の発言に筆者は可能性を見出すからである。

しかし私は、ここで「日本」ということが、一つの、本質的ではあるが、経過すべき点に過ぎない、ということも強調しなければならない。と言うのは、「経験」と「思想」との問題は、科学とは次元を異にしつつも、やはり一つの普遍性を目指すからである。その普遍性がどのようなものであるかは、「思想」そのものの本質として、遥かな道程を歩き尽くして明らかにされなければならない。、『経験と思想』、46頁。)

ここには、普遍性への志向がみられる。世界に開かれた「経験」を形作するために、まず、「日本」という条件を背負って、熟視しようというのである。文明の性格の中に普遍性への志向があるとすれば、まさしく森有正は文明への参画を試みたのである。森有正が学んだ西欧文明は多分に「理念化された西欧文明」と思えるが、安易な並行関係の西欧対日本という対立関係のみでない視点をこそ、われわれは見出し、強調するべきであろう。当然こうした努力が積み重ねられれば、日本を経由した「理念化された西欧文明」は、西欧文明さえ相対化した人間の文明への視点の可能性も示唆するのである。

### 3. 小結

単純化すれば、森有正はフランスで思想研究者から思想家へと変貌した。森有正論を書く困難の多くが、そのような変貌をした思想家の思想を「研究」という安易さに耐え得ないためである。筆者もそうしたそしりを免れえない。しかし、森有正の思想における教育の意義付

けについて考察することで、森有正の思想の価値を再認識する一助にはなったことと思う。さらに、筆者は森有正がフランスの教育を激賞する理由は、彼自身の思想形成の道筋とフランスの教育のありかたが同調していたことを明らかにした。このことは、「たまたま、森有正の資質がフランスの教育にあったのだ」と、批判することも可能だが、森有正がフランスの教育の中核である「自立の人生を開拓する」性格を、フランス社会の性格の考察との関係から指摘したことの意義は大きい。フランス語およびその教育の性格への過度の傾斜についても、筆者は日本語ペシミズムと思える弱点を指摘したが、同様に、フランス語およびフランス語教育の中にある、「現実を対象化する性格」への森有正の洞察には学ぶべきものがある。

五月革命前後より、フランス国内からも多くの批判がフランスの教育になされているが、日本人である森有正であるからこそアイデンティティーの確立を促すフランスの教育の長所を明確化できたといえよう。この長所は、文化の違いを超えて、あるいは近代国民国家の原理をさえ超えて一考するに価するものだと考える。

## 注

- (1) 『教育目的の比較文化的考察』玉川大学出版部、1995年。  
『国際化時代日本の教育と文化』東信堂、1998年。
- (2) 二宮正之編『森有正エッセー集成』1～5、ちくま学芸文庫、1999年。については、『集成4』のように本文中に略記する。
- (3) 加藤周一、三浦信孝「日本にとっての多言語主義の課題」、三浦信孝『多言語主義とは何か』藤原書店、1997年、328頁。
- (4) 辻邦生、所雄章「森先生と「定義」とアランと」、アラン著、森有正訳『定義集』みすず書房、1988年、193頁。
- (5) 杉本春生『森有正論』湯川書房、1972年。
- (6) 石堂常世「フランス—知性主義の教育的挑戦—」、石附実編著『比較・国際教育学』東信堂、1996年、118～121頁。  
桑原敏明「フランス—強い伝統：自由と責任—」、佐藤三郎編『世界の教育改革—21世紀への掛け橋』東信堂、1999年、114～115頁。
- (7) 桜井哲夫『「近代」の意味—制度としての学校・工場』NHKブックス、1984年。
- (8) 西川長夫『フランスの解体？—もう一つの国民国家論』人文書院、1999年、81頁。
- (9) デュルケム著、小関藤一郎訳『フランス教育思想史』行路社、1981年。
- (10) 『生きることと考えること』講談社現代新書、1970年、24～25頁。
- (11) 関屋綾子『一本の樫の木—淀橋の家の人々』日本基督教団出版局、1981年、182頁。
- (12) 同上書、113頁。
- (13) 『バビロンの流れのほとりにて』の系列の書簡・日記体のエッセー群は内省的で文学的な文明論かつ自己省察のあとであり、多くの熱心な読者と影響力を持つ主要作品群である。初出は1954年。
- (14) 今橋映子『パリ憧憬—日本人のパリ』柏書房、1996年、337頁。
- (15) 『経験と思想』岩波書店、1977年。国際基督教大学での集中講義を基にした哲学作品であり、これまでの仕事の集大成であり、エッセンス的な著作である。
- (16) P. フルキエ著、中村雄二郎他訳『哲学講義』1～4、ちくま学芸文庫、1997年。などが邦訳としてあ

る。

- (17) ミシェル・ド・セルトー著、山田登世子訳『文化の政治学』岩波モダンクラシックス、1999年、137頁。
- (18) 杉本春生『森有正—その経験と思想—』花神社、1978年、249頁。
- (19) 石堂常世、前掲書、118頁。
- (20) 八木晃訳『アラン著作集 7—教育論』白水社、1981年、92頁。
- (21) 橋田和道訳『人間的飛躍』勁草書房、177～196頁。
- (22) 橋田和道訳『アラン教育随筆』論創社、1999年、19頁。
- (23) ブルデュー、パスロン著、石井洋二郎監訳『遺産相続者たち—学生と文化』藤原書店、1997年、40頁。
- (24) 井上ひさし『本の運命』文春文庫、2000年、135～136頁。
- (25) 田中克彦『言語から見た民族と国家』岩波書店（同時代ライブラリー）、1991年、9～10頁。
- (26) 同上書、46頁。
- (27) 同上書、237頁。
- (28) 森有正『日本語教科書』大修館書店、1972年。
- (29) 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書、1973年、131頁。
- (30) 中村雄二郎『西田幾多郎 I』岩波現代文庫、2001年、50～51頁。